

目 次

はじめに 情報処理センター長 田岡 文夫

特集 「Facebook 使ってますか」

私の Facebook 体験記 環境教育実践センター・教授 岡本 正志・・・・・・・・・・
Facebook 活用法:私の場合 音楽科・教授 田中 多佳子・・・・・・・・・・
Facebook の楽しみ 家政科・准教授 湯川 夏子・・・・・・・・・・

「情報機器の操作」における電子黒板の利用

産業技術科学科 多田 知正・・・・・・・・

平成 23 年度情報処理センター利用結果

平成 23 年度利用状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
情報処理センター利用授業時間割表、平成 23 年度集中講義など・・・・・・・・
平成 23 年度情報処理センター利用授業内容・・・・・・・・・・・・・・・・
平成 23 年度 I P C NEWS の発行状況・・・・・・・・・・・・・・・・
平成 23 年度行事日誌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
情報処理センターワークステーション利用者一覧・・・・・・・・
情報処理センター関連委員会等歴代委員・・・・・・・・
編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

はじめに

情報処理センター長 田岡 文夫

皆様方には、平素より本学情報処理センターの運営に、ご理解とご協力を頂きまして感謝に堪えません。ことに、当センター長として、私、一期二年の任期を本年3月末でともかくも終えることができ、4月より二期目の任期を務めております。改めて厚く御礼申し上げる次第です。当センターの運営は、日々の実務を次長の多田知正先生、専属職員の秋山剛志さん、高木亜里子さんに負うほか、指導員として若干名の学部生、院生諸君に参加頂いておりますことはご案内のとおりであります。加えてこうした運営実務に関する方針検討、業務点検につきましては月一回のスタッフ会合で行われておりますが、そのメンバーが本年4月から入れ替わりました。吉江崇先生(社会)、延原理恵先生(家政)がご退任になりますとともに、アンドリュー・オーバーマイヤー先生(英文)、深沢太香子先生(家政)に新任頂くこととなりました。ご退任の両先生にはこれまでのご尽力に対し厚く御礼申し上げます。沖花彰先生(理学)、佐竹伸夫先生(数学)、村田利裕先生(美術)、小松崎敏先生(体育)の四先生が留任下さいましたが、現メンバーの六名の先生方には、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

さて、このたび今年度年報が発行の運びとなりましたが、今年度は特集のテーマとしてFacebookを取り上げました。IT一般とともにFacebookを始めとするソーシャルネットワークサービス(SNS)の普及や利活用の進展は社会経済に多大の影響をもたらしておりますことは、周知のとおりであります。情報交換や情報取得にともなう費用、つまり情報費用を格段に引き下げることを通して市場経済のあり方そのものを大きく変えつつあります。教育分野もその例外ではありません。教育そのものにもまして、学校・大学経営に関して、SNSの利活用の可能性は注目されているようでもあります。卒業生や同窓会会員の補足、学内行事の案内はじめ学生募集活動などへの利用を見かけることが多くなりました。そこで本年報では本学におけるFacebookのユニークな利活用の実例を紹介したく、三先生にご執筆をお願いした次第です。ご多忙にもかかわらずご寄稿頂きました先生方には改めて厚く御礼申し上げる次第です。

特集

「Facebook 使ってますか」

私の Facebook 体験記

環境教育実践センター・教授 岡本正志

1. Facebook に誘い込まれてしまった

ツイッター、ブログ、フェイスブックなどなど、次々と耳なれない言葉が飛び交っている。私のそもそもの専門は通信工学なのだが、学んでいたのは40年以上前のことで、まだ電子管などの講義が中心であったし、コンピュータといえば大型計算機のことであった。電電公社の武蔵野電気通信研究所に液晶の研究を見に行ったことがあったが、10cm 大の液晶に ABC という文字を映し出すことがやっとできはじめたばかりで、これからはこの技術が急速に進歩するだろうという研究者の説明にワクワクしたことを覚えている。学内でも、当時の最先端技術の研究者を招いて、さかんにコロキウムのようなことがおこなわれており、液晶の第一人者による非晶質物性の講演にいたく感心したりしていた。私自身は誘電体薄膜の電磁的な特性を調べていたのだが、技術発展がこれほど急速に行われるとは思ってもいなかったし、インターネットという巨大なネットワークが出現することなど想像もしていなかった。今日では、通信の意味合いが過去とはまったく異なってしまった。世界中と簡単にコミュニケーションできる時代となったことにあらためて感心してしまう。

こうした私だが、以前は自分の WWW ページを編集、公開していた。しかし、数年前に閉鎖してから今日まで再開していない。そうこうするうちにブログとかツイッター、フェイスブック（以下 FB と略す）などが登場してきたわけである。中東の政治革命にずいぶん影響を与えた、などという報道がなされていたので「どんなものだろうか」とは思っていたが、何となくピンとこないまま手を出すことは控えていた。

2011 年の夏、留学生の研修旅行を引率することになった際、家政科の Y 先生と一緒したが、旅行後に、その写真をインターネット上のアルバムに公開しておきました、とメールをいただいた。「インターネット上のアルバム???」、Y 先生は何やらすごいことをしているのだろうか、公開されたアドレスに従ってネット内のアルバムに導かれることになった。それが FB に触れた最初である。正確に言えば、それ以前に、知り合いから、FB を始めたので友人登録をしてほしい、というメールが何通か届いていて登録をしたことはあったが、訳が分かっていなかった。

Y 先生のアルバムを見てから、Y 先生の FB をのぞくようになり、友人登録をすることになったが、やがて音楽の T 先生から FB をするように、との命令が下った。T 先生は、私の所属する委員会のヘッドであったので、否応なく登録することになり、よりコミットすることになったのである。

こうして時々、Y 先生などの FB をのぞいていたが、食事した料理の話が次々と登場して、Y 先生がいかに美味しく楽しい毎日を過ごしているのかがインターネットを通して送られてくる。料理も良いが、他の情報のやりとりも欲しいと思っていたので、時間があった時に、少し発信してみるか、と初めて簡単な文章を書いてみた。もっとも使い方があまり良くわからないままにいじっていたら、いつの間にか発信されてしまい、自分の FB をつくることになってしまったのである。それが今年（2012）の4月のことである。

2. Facebook とはなにか

FB には、日々のできごとなどを書く近況欄や、少し長めの文章を書けるノート、写真をまとめたアルバムなどが用意されていて、様々に発信できる。しかも、FB に接するには登録が必要であり、友人になるには承認を経なければならない。内容の公開を友人のみに制限することもできる。このように、ある程度はクローズされているので、多少は安心かもしれないと思って、「甲賀庵のくらし」とか「私の散歩道」、「農場実習のようす」などを時々掲載するようになった。もっとも私の場合、FB は公開してあるので、登録している人は誰でも見ることができる。したがって顔写真などは載せないようにしていたのだが、アツという間に「ともだち」登録した留学生によって公開されてしまった。

こうして FB を始めてみて、私の経験から気づいた FB の実態について書いてみよう。

まず、FB はきわめておせっかいである。何かを書くと、登録した人々に、岡本が何か書いた、とお知らせメールが送られる。あるいは友達の誰かが FB をいじると、即座に私にもメールが届く。

FB には、「いいね」というボタンがある。書いてあることに興味をもてば、このボタンを押せばよい。あるいは、読んだということを相手に知らせるためにもボタンを押すことができる。そのすぐ下には「コメント」という欄もあるので、簡単に何らかのコメントを書くことができる。しかも、操作した者が誰なのかも示される。つまり、誰が「いいね」を押したか、誰が「コメント」をしたのかのFB 作成者にも伝わるしくみになっているのである。FB を公開している場合には、その FB を訪れた人すべてにそうした情報がわかるようになっている。これは通常の WWW ページやブログなどと最も異なっている点であろう。誰でも、情報発信をすれば、その情報がどのように受け取られたのか気にかかるが、FB はそこをうまく設計して、お互いのやり取りを促進するような仕組みとなっているのである。

こうした仕組みは、文書ばかりでなく、アップする写真にも付けられている。「タグ」というしかけが備えられていて、公開した写真の中に友達が写っていれば「タグ」を付けることができるが、そうするとその写真が相手の FB にも自動的に貼付けられるのである。私の写真が公開されてしまったのは、「ともだち」になった留学生が私の写真をタグづけして送ってきたからである。そこにはご丁寧に「岡本先生」とメモまで入っているので、とうとう私の貧相な姿が公開されてしまったわけである。

ではこうした仕掛けの中で、FB 内ではどのようなやりとりが行われているのだろうか。

すでに見たように、様々なしかけによって簡単に FB を作ることができるのだが、簡単であるということは長所でもあり、短所ともなる。私が発信した内容で言えば、反応があるのは食事である。甲賀での私のくらしは、朝 5-6 時頃に起床して畑に行き、そこで収穫した野菜を朝食の材料とする。私はそれが嬉しいので、FB に写真入りで「今日の朝食」などと紹介してみた。そうすると、すぐに「いいね」と反応がある。それに味をしめて今度は「散歩道」の写真をアップしてみた。自分では、まことに美しい里山の散歩道だと思うのだが、まったく反応がない。また、ちょっとした近況を報告したものには反応があるのに、少し真面目な文章を書いてみると反応がない。

たとえ反応があっても、書いてくるコメントは、基本的に2こと3ことである。よく見ると「携

帯から」アップしている。私は流行りの携帯は持っていないので、FBを見る時もアップする時も机の前に座ってパソコンから行う。だからすぐに反応はできないし、ゆっくり書いたり読んだりしたいのだが、世の中はそうではない、ということにやがて気づくことになった。これは私のFBにかぎったことではなく、私の「ともだち」のFBでも事情は同じように見える。もっとも、当初の「ともだち」は、Y先生やT先生などごく少数の人をのぞけば、学生や留学生たちであったので仕方ないかと思っていた。FBの世界の住人の多くは彼らであるので、そこでの会話の正体が上記のような軽いやりとりであることには逆らえないとも思っていたのである。

そのうちに少しずつ「ともだち」が増えてきたが、若者でなくても、その内容は上とさほど変わらない。肩を張って小難しいことを書くのではなく、日々のくらしのちょっとした様子を、たとえ価値があろうかなかるうが、誰かに伝えたい人が世の中にたくさんいるということである。

私の世代では、FBをしている者はまだ少ない。したがって同じ研究者仲間でコミュニケーションすることはない。しかし、時には思わぬ人から連絡が届くこともある。先日、イランとメキシコからコメントが届いた。前者は私がイラン訪問をしたときにお世話してくださったイラン文部省の役人である。すでに退職してトルコに住んでいるようだが、私とFBの「ともだち」となっている。メキシコからは、以前に私の研究室に留学してきていた学生からであったが、今、メキシコの大学院で学んでいるとのことである。科学史と物理教育の古い友人からも「ともだち」の承認をもとめるメールが入った。私は基本的には自分から友達請求をすることはないが、何かのきっかけで私がFBをしていることが伝わるようである。

彼らのFBも、内容は大差ない。趣味や生活の断片をみんなに報告して元気な様子を知らせているということだろうか。自分の考えや訴えたいことを書くのはブログなどの役割で、FBはつながりを持ちたい人の「絆をたもつツール」なのだろうと思う。ただし、うまく使えば世界中の人々とコミュニケーションできることは間違いない。私自身はまだそのようには使えておらず、日常を交歓する絆の一つとして利用しているにすぎない。便利な世の中になったのだが、こうしたネット上の絆が、どれほど豊かな内実をもつのだろうか、いらぬ心配をするこの頃である。

Facebook 活用法：私の場合

音楽科 教授 田中多佳子

はじめに

このような特集があったら是非読んで勉強させていただきたいと思う私が、何故、書く側になっているのか。だが、よくわからぬまま、Facebook と曖昧に関わり続けている一教員として、ありのままを披露することで、まだ接したことのない方々には何らかの参考になり、また熟練した方々からは何らかのご教示をいただけることを願い、筆をとらせていただくことにする。

1. Facebook との出会い

そもそも自分がなぜ Facebook 中に居場所を得ることになったのか、そのきっかけが思い出せない。最近、自分のホームページが「タイムライン」という表示形式に一新されたので、時系列をたどりやすくなった。それによれば 2009 年 8 月 8 日 17:50 に「私は猛暑の京都の大学でまだ働いています」と英語で発信したのが第一声となっている。恐らく海外で会った研究者か、留学生の誰かに返事をしたものと思う。ひとたび Facebook に関わり出すともっとも煩わしいことは、通常使用しているメーラーに、Facebook を差出人として、例えば「Facebook のお知らせがあります」と題されたメールが頻繁に来るようになることである。(もっともこれは設定により回避できるらしいことを最近聞いた。) メールは次のような調子である。

「こんにちは、田中 多佳子さん

Aさんが、あなたがタグ付けされている写真について「いいね！」と言っています。
よろしく願いいたします。」

「AさんからBさんと友達になりませんかという紹介がありました。」

「友達があなたの返事を待っています」

「Cさんが自分のウォールへの投稿にコメントしました。」

何が「タグづけ」か「ウォール」か、また「よろしく願いいたします。」なのか意味もわからず、ただ煩わしく、一年くらい放っておいた。

2010年、たまたまチケットが手に入り、タイトルの意味も知らぬまま、アメリカ映画「ソーシャル・ネットワーク」(*The Social Network*)を観に行った。日本語字幕には猛烈な速さで見たこともないカタカナ言葉の羅列が通り過ぎ、理解できない部分も多かった。しかし、Facebookなるものがどのような経緯で作られ、何故、大陸を越えて拡大し、国の体制すら変えてしまうような巨大なもう一つの世界へと成長を遂げたのかを、漠然と理解することができたと同時に、ある種の恐ろしさも感じた。

2. メーリングリストとしての活用

2011年10月に所属学会の全国大会を本学で引き受けることになった。それに向けて3月に発足した実行委員会メンバー10数名によるメーリングリストが Facebook の中に作られた。Facebook に通じた人が、その中に閉じられたグループを開設し、招待された実行委員会メンバ

一が全員それに応じてそこに入るという形であった。互いの発言は特定のアドレスに投稿するか、それに返信する形でこのグループのメンバーだけに共有される。通常のメーラーにメールが来るし、自分の Facebook のホームページの中の当該グループに入っていけば、過去の発言の経緯も確認することができる。時にはそこでワードや PDF などの会議資料も共有して議論したが、私には技術的に文書のアップの仕方がよくわからなかった。いずれにせよメーリングリストとしては問題なく便利に使用できた。

3. 国際交流への活用：留学生たちをめぐるコミュニティー作り

本学で10年近く国際交流委員を勤めてきた私が、今、Facebook に最も期待を寄せているのは、本学への留学生たちとのコミュニケーション・ツールとしての機能である。

刻々と財政的に厳しさを増してゆく本学運営の中で、入試制度や免許パターンの見直しなどさまざまな改革が行われる中、本学に学ぶ留学生たちにも厳しい目が注がれるようになった。本学に学ぶ留学生数は正規生・非正規生を全て合わせると、30人台まで落ち込んだこともあったが、現在はほぼ60名弱が在籍している。一言で留学生といっても、入試に合格して正規の学部生・大学院生として日本人学生と何ら変わらない学生生活を送っている者、本学の協定校から一年間派遣されてくる学部レベルの特別聴講生、日本の国費により1年間さまざまな国から派遣されてくる学部レベルの日本語・日本文化研修留学生、同じく日本の国費により1年半各国から現役教員が派遣されてくる教員研修留学生など、年齢も国も日本語のレベルも研究内容や専門も全くまちまちである。そのような彼らに一斉に連絡をとるには、一括送信も掲示もあまり有効ではなく、本学在籍中ですら容易なことではない。まして彼らが帰国後・卒業後、どうしているのかなど知りようがない。また、共通の授業もなく、国際交流会館だけでなく向島の留学生センターや下宿など、住んでいる場所もさまざまなので、留学生たち同志の日常的交流も難しい。さらに、国際交流委員会では「国際交流活動認定証 (ICEEC)」という学生表彰制度まで作り、腰の重い本学日本人学生たちの国際交流意欲を何とか高めようと努力しているが、日本人学生たちと留学生たちとが交流するツールもない。

そのような状況下で、数か月前、留学生会を束ねる留学生の一人が学生課の職員のアドヴァイスで「「京都教育大学」から世界へ」というグループを Facebook の中に立ち上げた。グループのメンバーから「追加」されるとメンバーになり、メンバーは誰でも自由にメンバーを「追加する」ことができる。現在在籍する留学生はもちろん、帰国留学生たちや、過去の国際交流委員会関連教職員たち、国際交流会館のフェローやチューターたち、本学の研修・短期留学体験者たちなど、次々にメンバーが知っている人々を招き入れ、現在、メンバー数は140人を上回っている。

このグループの存在がとても実用的だと感じたのは、ある学生の「国際交流会館前の街灯がきれていて暗くてぶっそうだから気をつけてね」という投稿を読んだ時であった。学生たちもすぐに反応し、職員も機敏に対応することができた。国際交流会館集会室で留学生会が年に数回催しているパーティーの案内も、掲示やチラシよりはずっと効果的で周知が促進され、先日は卒業生の参加も見られた。まだそう多くはないが、海外の帰国留学生たちや短期留学中の日本人学生たちからも近況や「なつかしい！」などと近況報告が寄せられるようになった。会館の催しや留学生旅行の様子、さまざまな活動などの写真もアップされると、国内外のメンバーからの反応もよく、文字通りの「交流」が感じられ、会話も賑やかになってきた。もっとこの輪を広げたいものだと思う。

4. 活動記録の共有できる場、活動紹介の場として

Facebookは容量に制限がないため、写真や動画なども自由にストックしておくことができる。前項のようなメールのやりとりも記録としてそのまま残っていく。私が次に Facebook に期待するのは、共有の記録の保管場所としての機能である。大学のサーバーにも個人のサイトにも、関係者がいつもアクセスできるように共通の写真やメールを保管しておける場所はない。

今年度前期の留学生対象科目「世界の教育A」で日本の歌舞伎を紹介された垣内幸夫先生が、「授業内では時間が足りないが、隈取りを体験したい人には課外で応じてあげるので申し出なさい」と呼びかけられたところ、6~7名の学生が名乗りをあげた。私はたまたま研究室におりノックに応じてドアをあけたところ、写真のようなすごいメイクの学生たちに驚かされた。彼らのポーズはモンスターのまねではなく、恐らく授業で習った「見得を切る」ことを実践しようとしているものである。垣内先生は、「全く同じ絵を見せてお互いに描き合わせたが、一人ひとり全く感性の異なる個性的デザインになるのが面白い」とおっしゃっていた。

私の撮ったこれらの写真をどうやって渡そうかと彼らに尋ねると、学生たちが「Facebook にアップして下さい」というのでやってみた。これらに限っては、誰かわからないので、個人情報ということをあまり気にかけることなくできた。インパクトが強かったようで、当該の学生たち以上に外部からの反響が大きく再度驚かされた。これらが伝統的な歌舞伎の隈取りであると紹介されても困りものではあるが…。



5. 卒業生たちの動向把握や音楽関係の情報交換の場として

私たちの教育の効果は、彼らが卒業後に教員や社会人となって初めて確認できる部分が多い。そんな教員として便利だと思うのは、卒業生たちのその後をしばしば垣間見ることができることである。また、昨今、大半の大学は自らの強力な潜在的応援団として同窓会や卒業生に注目している。ホームカミングデーなる場が本学にも設定されて久しい。音楽科でも茶話会を設けて、教員たちが卒業生たちを待ち構えているが、参加数は決して多いとはいえない。参加者は、年齢層が高いほど、個人宛に送付した案内葉書や直接の口コミによってたまたまその機会を知った人が多いが、卒業生の大半はホームカミングデーそのものの



存在すら知らない。関心があれば大学のホームページに掲載されているから知るはずだといっても、卒業生たちが日常生活の中で自分の卒業した大学のホームページを頻繁に見ることはまずない。

そんな中、最近、ふとしたきっかけから、担任していた学年の卒業生たちとのやりとりが始まった。タイの会社に勤務している者が「洪水はこんなにひきました」という写真をアップしていたり、アメリカ留学中の者からコンサートへの招待状が届いたり、誰が結婚するという話が聞こえて来たりする。意外に身近にいる卒業生ほど近況を知らないことも多く、たまたまコンサートなどで偶然再会した卒業生たちと、互いに名前を Facebook で探し合ってやりとりが始まったケースもある。リアルな世界で出会ってもメールアドレス交換というのはしばらく面があるが、互いに「Facebook でまたね」といえばバーチャルな世界での再会は意外に簡単である。

大学では卒業生たちのアドレスを把握することは難しいが、Facebook を利用すれば口コミ以上の広範囲、ホームページより限定されたターゲットに、直接、呼びかけをすることが可能である。もっと限定された「イベント」という機能を使い、チラシの PDF などとともに、特定の人々を「招待」することもできるようだ。私は招待されるばかりでする側としてその機能を使ったことはないが、招待された人は「参加する」と意思表示することもできるので、主催者側は参加予定数がある程度予測することができる。

また、音楽科はその特性上、教員も現役学生も卒業生も何かしら音楽活動や制作、もちろん教育にも関わっている。写真だけでなく動画も音のファイルも気軽にアップできるし、互いに上記のようなイベントに招待し合うことで、現在、どんな活動をしているか知ること、時間が合えば実際に出向くこともできる。Facebook はそうした具体的・立体的な情報交換のツールとしても有益かと思う。

6. Facebook 活用の課題と問題点

Facebook 活用にあってやはり一番恐ろしいのは個人情報の扱いである。Facebook は原則として、実名で一人が一つのアカウントをもつことを前提としている。そして各人を紹介するために性別や年齢、居住地や勤務先、血液型や誕生日、趣味など書き込む欄が用意されている。私は性別と誕生日、居住地のみしか登録していないが、確かに名前だけだと多くの同姓・同名者があり、漢字でなくローマ字で登録している人も多く、人物の同定が難しい。実際に岡本正志先生を Facebook の中で探した時にはその状態で、結局、生身のご本人に直接確かめたくらいである。

Facebook のネットワークは、基本的に具体的に知っている人に自分から「友だちリクエスト」を送り、相手が「承認」するとコミュニケーションがとれるようになる。そして設定に気を配らないと、「友だちになった人」全員に自分の掲示板（ウォール）の記述や写真のすべてが見られるどころか、友だちたちに先述のような案内メールが届けられることになる。「友だち」というくくりで、家族から同僚、研究仲間や友人、留学生や現役学生まですべて一括して見られることにはやはり抵抗があるので、もちろんウォールへの記述内容はかなり限定される。

一方で、自分が「友達」と認めた人々全員の間、互いの会話が公開される。さまざまなレベルの友人に、不必要にプライベートな情報が明らかにされる。恐らくその内容が自動的に分析され、それに応じて個人個人にもっとも効果的と判断された広告が配信される。だからこそ、企業にすれば Facebook の宣伝威力は大きく、世界の一大企業にのし上がったわけである。

実際に、数日前のニュースで、Facebook の調査結果が発表され、6月末の時点で、過去1ヶ月

の利用者 9 億 5000 万人のうち 8.7 パーセントが、二重登録者や虚偽の登録者であると公表された。二重登録ではなくとも、知人の中には、実名でなくニックネームのように実名を少し変型させた仮名を使用している人や、わざと異なる出身地を「沖縄」などと変えている人もいる。自分の顔写真を公開するということにはかなりの抵抗があるのでホームページにはインドの楽器の写真を掲載している。同様に愛犬など動植物や、自分の顔にしてもシルエットや過剰な化粧を施したり特殊な角度から写したりした写真を使用している人も多い。そこまでしているのに、例えば、留学生たちから、ある日突然、それこそ「タグづけされた写真」が自分のホームページに張り付いて度肝を抜かれたことが何度かあった。初めはそのタグのはずし方がわからず当惑したが、詳しい学生に聞いてやっと自分用にダウンロードし、ホームページからは削除することができるようになった。

先日の留学生旅行の全員の集合写真も飛んで来た。その下に、「この写真に写っている友達」として一部の人の名前が書き出され、おまけにその名前にカーソルを持っていくとその人が写っているあたりを大きな四角で囲む表示ができるのである。さらに、スマートフォンで Facebook を利用している人々の中には、本人が意識的にそうしているのか否かわからないが、GPS 機能によってその人のホームページには、タイムラインの中にいつどこにいたかという地図まで表示される人もいる。そういった現象に触れると思わずぞっとする。

個人情報保護のための機能強化は、Facebook の中で行われていて、さまざまな設定が可能なようである。しかし、それらの機能を熟知し巧みにプロテクトをかけながら使用できるユーザーがどのくらいいるのだろうか。情報の共有や自由な議論と、個人情報の保護のバランスは一体どうしたら良いのか。便利さと、それが他人の目にさらされ巨大なスケールで管理されている恐怖とをいつも天秤にかけて接しているような気がする。

Facebook の楽しみ

家政科・准教授 湯川 夏子

1. はじめに

私が Facebook を使い始めたのは、2011 年 2 月。おいしかったお店では、料理写真を iPhone でパチリと写して、即座に位置情報（お店へのリンク）と共に Facebook に投稿する。ネットでみつけた興味深い記事も、簡単にリンクを貼って紹介できる気楽さがいい。単に友人との交流だけでなく、卒業生や研究仲間をはじめ、多様な人との情報交流の場であり、「ロコミ」情報を得る場でもある。企業の「Facebook ページ」も充実してきて、もはや、テレビや雑誌からの情報よりも、Facebook を通じた情報取得が主になっている感すらある。そして、友人の研究者いわく、Facebook は「研究の営業ツール」という。私自身はまだ十分に教育研究に有効に活用しているといいかねるが、その予感はある。Facebook の特徴とその楽しみや、活用の可能性について紹介してみたい。

2. Facebook の特徴

(1) 実名性～実生活とつながる

mixi や twitter など他のソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）と異なる特徴はこの「実名性」である。現在「友達」約 150 名。「友達申請」をして、「承認」されたらお互いの投稿した記事や写真を読めるシステムである。Facebook の基本方針どおり、150 人は、ほぼ全員、実生活でつながりのある人ばかりである。メールのアドレス帳や、プロフィールに登録した出身学校名から、多くの友人知人がみつかると。また Facebook は友達の友達を「友達ではないですか？」とつながりのある人を「芋づる式」で紹介してくれる。大変おせっかいな Facebook だが、おかげで数年ぶりの友人知人や、卒業生とつながりができたことは大変嬉しい。中でも数十年交流の途絶えていた小学校時代の幼馴染が海の向こうから見つけてくれて、交流が再開したのは、感激してしまった。再開した友人たちと実際に「プチ同窓会」として会うことも増加した。どなたかがネットで「たくさん人間関係を保持し、活性化する仕組み」と書かれていた。人生のどこかにおきざりにしてきてしまった友人たちとまた再会し、人生を再構築できること、それは人生を豊かにしてくれる。これは一番の楽しみである。

(2) 伝搬性～多くの人と共有（シェア）する

もう一つの特徴が「共有（シェア）」という概念だ。気に入った情報や画像を友人とシェアする仕組みがたくさん Facebook にはある。共有された情報は、友達のそのまた友達にシェアされ、ネット上に拡散していく。ネットの「ロコミ」である。「アラブの春」や「原発のデモ」の引き金が SNS の情報伝播力だったといわれている。先日も、とある新聞の投書記事の紹介が人から人へ伝播し、6 万件も Facebook で反響があったという。したがって、自分自身が少数しか「友達」がいなくても、このシェアによって、多くの人に伝播していく可能性を秘めている。

(3) 国際性～海外とつながる

私の Facebook のアカウントを取得したきっかけは、海外の研究者とのコンタクトだった。

結局メールで連絡を取ることが出来たが、海外での普及率は非常に高く、メールよりも便利なコミュニケーションツールとして使われているようだ。また、母国に戻ってしまった英会話の先生や留学生、国際学会で知り合いになった研究者、など外国の方と交流が保持できている。

3. 研究教育への使い方

(1) 情報の発信ツール

まだまだ十分な活用ができていないが、できるだけ教育研究活動の発信のツールにしたいという意図はある。食生活や食育について、興味をもったネットの記事や本、授業やゼミの様子、イベントの告知・報告など紹介している。発信した内容の反響が即座にわかるのがとてもいい。共感した記事には「いいね!」と押すボタンがあり、どのくらい共感を得たか反応がダイレクトに伝わる。「だし教室」の食育の紹介をしたときは、いつも反響が高く「私もこんな授業受けたかった」と友人たちも「いいね!」やコメントをくれ、手ごたえを感じる。授業や学校の様子は、卒業生もなつかしく読んでくれるようだ。このような双方向のやり取りが簡単にできる点は、ブログや従来のホームページと違い、非常にメリットがある。このように利用していると、コメントやメッセージ機能で、食に関する質問を時々受けるし、講演依頼が舞い込むこともある。まさに「研究の営業ツール」である。

(2) 情報収集

前述したように、Facebook は重要な情報ソースである。「食育」でつながりのある料理人さんたちからは、季節の料理に、小学校での食育の様子、ニューヨークなど海外での料理講習の様子など。企業の方からも、イベントの紹介などの情報がやってくる。残念ながら、現在のところ関連分野の研究者とのつながりが比較的少ないが、活発な分野では、研究グループの「Facebook ページ」も増加するなど、国内外の研究者同士の研究情報の交流に活用されているようだ。

友人たちとの交流からも、「塩麴」ブームや、バレンタインデーにお子さんが家の台所を占領して「友チョコ」作りに励む様子、などなど、食生活の「いま」を感じることができる。アメリカに在住の友達からは、自家製で豆乳からおから料理までつくる、海外在住者の興味深い食生活を知ることができた（某通販メーカーの豆乳製造器を友人2名共が持っていたのには驚いた）。

(3) ネットワークづくり

Facebook による交流は、まるで普段よく会っているかのようにお互いの親近感を強め情報を共有し、仕事を一緒にする上でも、非常によい円滑油となってくれる。また同窓会や研究会など、簡単に「Facebook グループ」を立ち上げることができ、グループ内での情報交換に利用できる。メンバーや内容は、非公開・公開どちらも可能である。「Facebook グループ」をもっと拡大したものが「Facebook ページ」であり、普通のホームページと同じように、Facebook を使っていない人にも公開できる。今後自分の教育研究活動の中では、このグループ利用を活用できればよいと思っているがまだまだこれからである。

4. 今後の課題

Facebook のメリットや楽しみ方を紹介してきたが、気をつけたい点もある。いくつか今後の課題をあげてみたい。

(1) 使いにくさ

ここまで Facebook を紹介させていただき、今頃いうのも申し訳ないが、少々、Facebook のソフトは使い勝手が悪い。使い方に慣れるのに少し時間がかかる。Facebook を登録したけれど、使い方がわからない、ということで使わなくなった、退会した、という方も少なくないのではないだろうか。もう少し簡単なソフトに改善してほしいと願っている。

(2) セキュリティ

実名で参加する分、誰もが心配するのが個人情報公開など、セキュリティの問題である。Facebook では多くの人とつながるために、個人のプロフィールページの記入欄が充実している。しかし、これらは公開範囲を選ぶことができる。Facebook 内で一般公開するのか、「友達」だけ、「友達の友達」などである。このプロフィールページは、一般検索にも公開・非公開を選ぶことができる。(私の場合は、一般検索には非公開にしているのので、google 検索ですでてくるのは、別の「湯川夏子」さんのページである。)自分が投稿した内容も、一般公開か、「友達」全員か、「友達」の中の一部のグループか、または数名を指定して公開することもできる。私も友人たちとのワイワイとした気楽なやりとりも多いので、「友達」限定の公開にしている。さらに仕事モードで使用するならば公開すればよいと思うが利便性と安全性は裏腹である。

もう1点、注意したいのが位置情報である。iPhone などスマートフォンで使用している場合、「位置情報」をオンにしていると、どの場所から投稿したか、明らかになってしまう。「近くにいるなら、これから会おう!？」という楽しい使い方でもできるが、自宅から投稿した場合、現住所がわかってしまう危険性がある。空き巣狙いなどを警戒して、リアルタイムに記事を投稿しないという出張の多い友人もいる。セキュリティについては、Facebook navi などの活用法のページが多くでているので参照してほしい。

(3) 学生との付き合い方

悩みどころは、学生たちとの付き合い方である。学生のスマートフォン保持率の上昇に伴い、学生が従来の mixi に加えて、Facebook もはじめるケースが増えている。学生からの「友達申請」を受けるのか?そこは、自分で一定のルールが必要だろう。双方向のコミュニケーションツールであるため、学生が投稿した内容も自然に読むことになる。学生が気楽に書いたプライバシーを知ってしまうのに抵抗がある場合があるし、Facebook でやり取りをしていると親近感がでて公平な対応が難しくなる可能性がある。現在のところ、こちらから勝手に「友達申請」を送らない、ということが在学学生も卒業生に対してもマイ・ルールである。友人の研究者は「基本的には、在学学生の「友達申請」は承認しておらず、卒業生になったら承認している」ということである。参考にさせていただきたい。

5. おわりに

教育や研究活動への活用は私自身まだまだであるが、有効な情報取得ツールであることは間違いない。最近では、100歳にして現役医師の日野原重明さんも始められた。Facebookを通じて、たくさんの生の声が届くようになり、若い世代の人たちとの交流が深まりまったという。「100歳のフェイスブックで 若返り」だそうだ。<https://www.facebook.com/shigeaki.hinohara>

日野原先生に負けず、使ってみようかな、という方、でも使い方わからないという方、気楽にお声かけください。ただし、私の内容は食べ物の話題ばかりですので、ご注意を…。

「情報機器の操作」における電子黒板の利用

産業技術科学科 多田 知正

1. はじめに

平成 23 年度より、本学に電子黒板が導入され、学部 1 回生対象の必修科目「情報機器の操作」の中で、全 15 回のうちの 1 回で電子黒板に関する内容を取り扱っている。平成 24 年度も引き続き実施したので、本稿ではその様子について報告する。

2. 授業の準備

「情報機器の操作」の授業は、通常は情報処理センターの端末室で行なっているが、端末室には電子黒板が設置されていないため、この時間のみ教育支援センターで授業を行なった。教育支援センターには、平成 23 年度に導入された P 社製の電子黒板（プロジェクタ投影型）の他に、平成 24 年度に導入された S 社製の電子黒板（液晶パネル型）があり、今回は P 社製の電子黒板 1 台、S 社製の電子黒板 2 台の合計 3 台を用意した。電子黒板の準備およびパソコンとの接続等は事前に教員が行なった。

3. 電子黒板の仕組みと接続方法

授業では、はじめに電子黒板の仕組みと接続方法についての説明を行なった。電子黒板とは簡単に言えば、画面を直接触って操作できるディスプレイである。専用のペン（指での操作が可能なものもある）で電子黒板の画面をタッチしたり、ペンを画面上で動かしたりすると、その都度ペンの位置がパソコンに送られ、通常マウスで行う操作をペンで行うことができる。また、パソコン側のソフトウェアでペンの移動にあわせて画面上に線や図形を配置することで、電子黒板上に直接書き込みをすることもできる。パソコンは一般的な Windows パソコンで構わないが、電子黒板を利用するには専用のドライバとソフトウェアをあらかじめパソコンにインストールしておく必要がある。このため、電子黒板専用のパソコンをあらかじめ用意しておくのが一般的である。パソコンと電子黒板の間には、画像情報を送り出すためのディスプレイケーブルの他に、ペンの位置情報をやり取りするための USB ケーブルを接続する必要がある。ディスプレイケーブルは、プロジェクタ等で使用されるアナログケーブル（D-sub 15pin）が一般的であるが、S 社製の電子黒板では近年普及が進んでいる HDMI ケーブルを利用することができる。また音声については、電子黒板にスピーカーがない場合、パソコンから直接音を出すか、別途スピーカーを接続する必要があるが、スピーカー付きの電子黒板では音声を直接出力できる。HDMI ケーブルで接続すれば映像信号と音声信号を同時に送ることができるため、接続の簡略化が可能となる。近年は HDMI 端子を備えたノートパソコンも増えていることから、今後はこちらの方式が主流になると思われる。

4. 文字や図形の書き込み

次に電子黒板の使い方についての説明を行なった。主な操作はマウスの代替としての利用とペンでの書き込みである。

電子黒板をマウスの代替として利用する場合、クリックやドラッグといった基本的な操作は画面を直接触れることで直観的に行えるが、右クリックを伴う操作についてはやや手順は複雑であり、機種によっても操作方法が異なるので注意が必要である。場合によっては接続されているパソコンを直接操作した方が早いこともある。

ペンを使っての文字や図形の書き込みは電子黒板ならではの操作と言える。画面上に書き込みができることは今どきの学生にとっては特に珍しいことでもないらしく、これといった反応は見られなかった。ペンの色や太さを変えるには、電子黒板の画面上にある操作パネルをタッチすることで行う。操作方法自体は直観的なものであり、それほど戸惑うものではないが、その都度広い画面上の特定の場所をタッチしなければならないのは意外に面倒である。また書き込んだ図形はあとで拡大、縮小、回転することができるが、これらの機能を実際に利用することはあまりないと思われる。

書き込みは通常ホワイトボードのように無地の画面に行うこともできるが、一般的な利用方法は PowerPoint を用いたプレゼンテーションの中で書き込みを行うというものである。

PowerPoint プレゼンテーションにおけるスライドへの書き込みには 2 種類の方法がある。一つは電子黒板の専用ソフトウェアの書き込み機能を使う方法である。この場合、PowerPoint のスライドの上に透明なシートが存在しており、その上に書き込みをするイメージとなる。専用ソフトウェア特有のさまざまな機能が利用できる反面、PowerPoint でページを変えても書き込みは削除されずにそのまま残るため、ページを進める前に書き込みをすべて消去しなければならず、実際には非常に使いづらい。もう一つは PowerPoint の注釈機能を用いる方法である。

PowerPoint にはもともとプレゼンテーション中にマウスを使ってスライドに手書きの注釈を書き込む機能がある。ただしマウスを使っての書き込みは非常にしづらく、実際にこれを利用するケースはほとんどない。ここで電子黒板を利用すると直接スライドにペンで注釈を書き込むことができ、かなり操作がしやすくなる。この場合書き込んだ注釈はそれぞれのページに関連づけられるため、ページを変えると書き込みが自動的に消え、前のページに戻ると以前の書き込みが復活するなどより自然な操作が可能となる他、書き込んだ注釈を PowerPoint のファイルに保存することもできる。ただし PowerPoint の注釈機能はマウスでの利用を前提としており、書き込みの際には右クリックでメニューを出す必要があるなど、ペンで行う場合は操作がかなり煩雑になってしまう。S 社の電子黒板は専用ソフトが PowerPoint の注釈機能と連携しているため、比較的操作が簡便で、PowerPoint での利用が実用的なものとなっている。

5. アプリケーションの利用

次に電子黒板で利用できるアプリケーションの紹介を行なった。これらのアプリケーションを利用する場合は、マウス操作の代わりに画面を直接ペンや指でタッチすることになる。最近スマートフォンやタブレットが普及していることもあり、このような操作方法に対する学生の戸惑いは特に見られなかった。

まず最初にいくつかのデジタル教材の紹介を行なった。教室へのパソコンの普及に伴い、デジタル教材の数も増え続けている。現在ではインターネットで多数のデジタル教材が公開されており、特に算数・数学や理科のデジタル教材が充実している。ただし電子黒板自体がまだそれほど普及していないため、電子黒板の特徴を生かしたデジタル教材はまだそれほど多くないのが現状である。また現職の先生方が公開しておられる自作のデジタル教材は、ご自身の授業の流れに沿った

形で作成されるため、他の先生がそのまま授業で利用するのは難しい場合もある。学生たちはまだ1回生で教育実習等も経験していないせいか、デジタル教材を見てもその便利さや使い方などが今ひとつ実感できていない印象であった。

またデジタル教科書の例として、小学校国語の教科書の紹介を行なった。教科書の内容を画面上に表示して、強調する箇所にマークをしたりすることができる。さらに、新しく出てくる漢字について、その書き順をアニメーションで表示する機能を備えている。電子黒板の普及にともなってこういったデジタル教科書も一般的になっていくと思われる。

教師が授業の中で使うデジタル教材の他に、生徒が使うことを想定した教育用ソフトも存在する。へんとつくりを組み合わせで漢字を作るクイズ形式のソフトや、表示された地図記号の意味を答える対戦ゲーム形式のものなどを紹介して、学生に実際にやらせてみたところ、それなりに盛り上がっていた。こういったものを電子黒板でみんなの前でやってみることで単なる発表や答え合わせよりも生徒の関心を引くことができるかも知れない。

さらにいわゆる「お絵かきソフト」を電子黒板で使用するという試みを行なった。電子黒板の専用ソフトでも簡単な絵を描くことは可能であるが、専用のソフトはより高機能で、本格的な絵を描くことも可能である。大きな画面に直接自由に絵を描けるということでかなり学生の興味を引くのではないかと思ったが(美術教育の専攻の学生もいたため)、実際には反応は今ひとつであった。電子黒板がペンの位置を検出するためには赤外線を利用するものが主流であるが、タブレットなどで採用されている静電容量方式のタッチパネルと比べると応答時間が遅く、また、たまに反応しない場合があるなど、思うように絵が描けなかったこともその一因だったようである。電子黒板を「電子キャンバス」として利用するにはもう少し技術の進歩が必要だと思われる。

いろいろなアプリケーションを紹介した中で、学生たちの反応が最も良かったのは、意外にもGoogleマップであった。電子黒板の大画面に写った航空写真に直接触れて操作するのはパソコンで見るとはまた違う感覚があるようである。最後に自由に使える時間を与えると、早速Googleマップを起動して、自分や友達の家を探して楽しんでいた。

6. 今後の課題

電子黒板は今後ますます教室への普及が進むと考えられる。教員を目指す本学の学生にとって、将来教員として現場に立った時にとまどうことのないよう、早い時期に電子黒板に慣れておくことは有意義であろう。ここでは授業を通じて明らかになった課題について述べる。

まずは電子黒板の数の不足があげられる。今回は50人程度のクラスに対して3台の電子黒板を用意したが、それでも1コマ90分の時間内では全員に電子黒板に触らせる時間が取れなかった。また単に「使ってみるだけ」になってしまったところも反省点の一つである。実際に教育現場で電子黒板を使う際に困ることになるのは、授業中での実際の操作よりも、むしろパソコンとの接続など事前の準備や、何か不具合が生じた時の対応といったところであると思われる。その意味では、本来は準備も含めて学生にやらせる方が望ましいが、授業の中でそのような時間を取ることは難しい。

学生が本当の意味で電子黒板に「慣れる」ためには、多人数クラスの授業だけでは限界がある。例えば模擬授業の中で電子黒板の利用を義務付けると言ったことや、「学生が電子黒板をいつでも利用できる教室」を用意して、放課後等に電子黒板を使った模擬授業の練習が気軽にできるような環境を整えることなどが必要であろう。

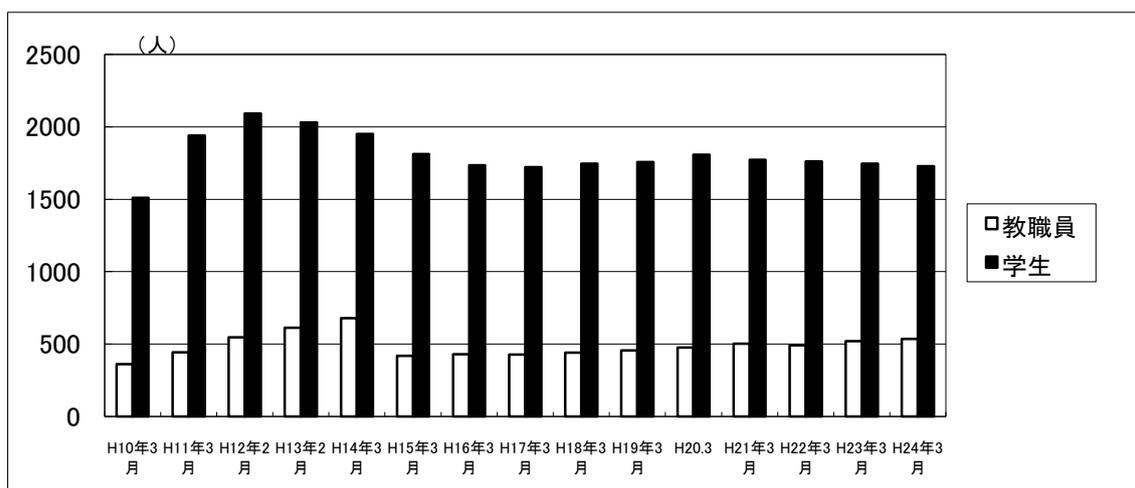
平成23年度
情報処理センター
利用結果

平成 23 年度利用状況

§ 1. 電子メール

(1) 電子メール登録者数 (H24.3.22 現在)

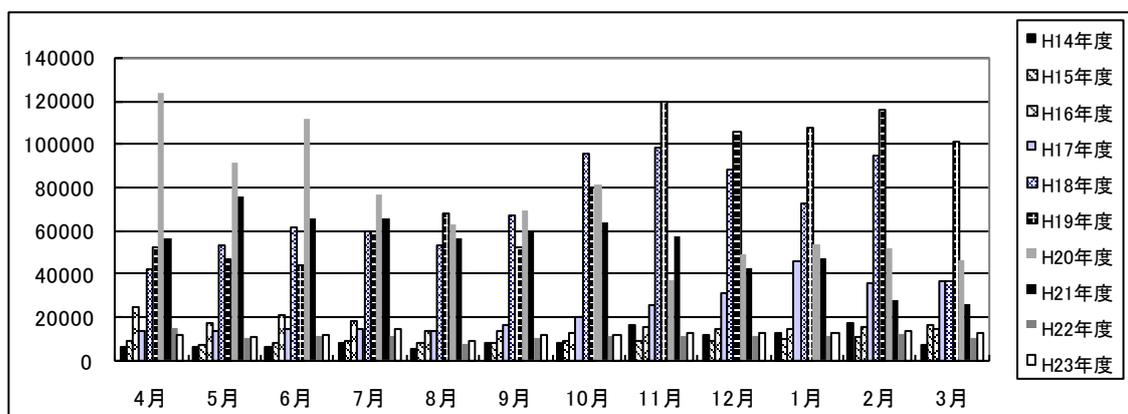
大学教員	164 人	附属教員	213 人	事務職員	158 人
学部学生	1422 人	研究生	19 人	院生	288 人
				合計	2264 人



平成 12 年度より学部改組に伴い学生定員が 1 学年 420 人から 300 人に減少し、その結果学生登録者数も減少したが 15 年度以降は大きく変化していない。教職員数もここ数年変わりが無い。1-4 回生は編入生も含め入学時に自動登録され、全学生が登録している。教職員も平成 17 年度から着任時に大学から付与する形をとっている。教職員は大学教員、附属教員、事務職員の他名誉教授も含まれる。

(2) 電子メール送受信数 (H23 年 4 月～H24 年 3 月)

4 月	11808 件/日	5 月	10422 件/日	6 月	11479 件/日	7 月	14080 件/日
8 月	9069 件/日	9 月	11276 件/日	10 月	11517 件/日	11 月	12383 件/日
12 月	12522 件/日	1 月	12641 件/日	2 月	13965 件/日	3 月	12522 件/日



月別 1 日あたり電子メール送受信数

1日あたりのメール送受信数を示す。平成21年度の2月（平成22年）からはメール数が大幅に減少しているが、これはシステム更新に伴ってメール数のカウント方法が変更され、従来重複してカウントされていた分が解消されたためである。また平成22年4月からメール数がさらに大きく減少しているのは、迷惑メールを配送せずに隔離するサービスを開始したためである。

(3) メールサーバ利用者用ディスク使用量(H24.3.22 現在)

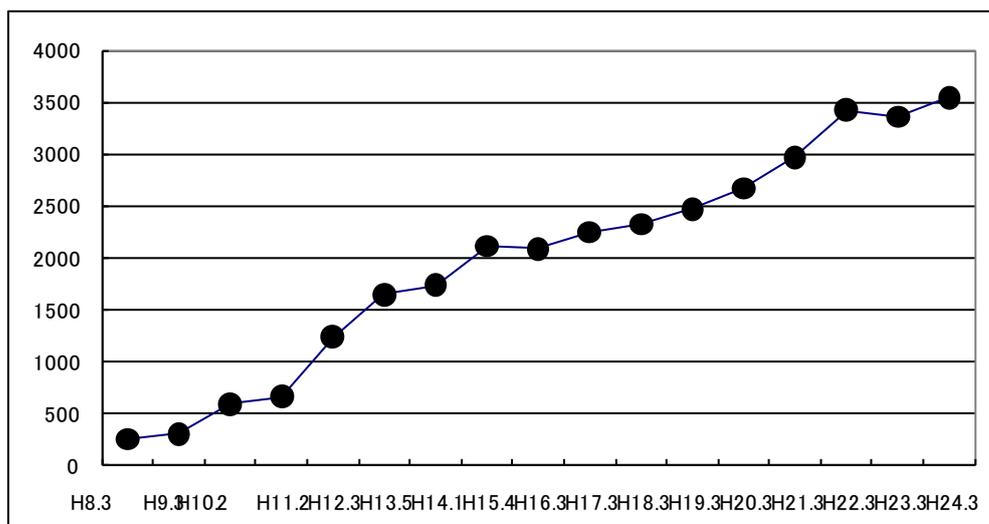
利用者領域 (/home) 総容量 5.13TB 使用率 32%

§ 2. ネットワーク

(1) 学内ネットワーク接続クライアント数 (H24年3月末)

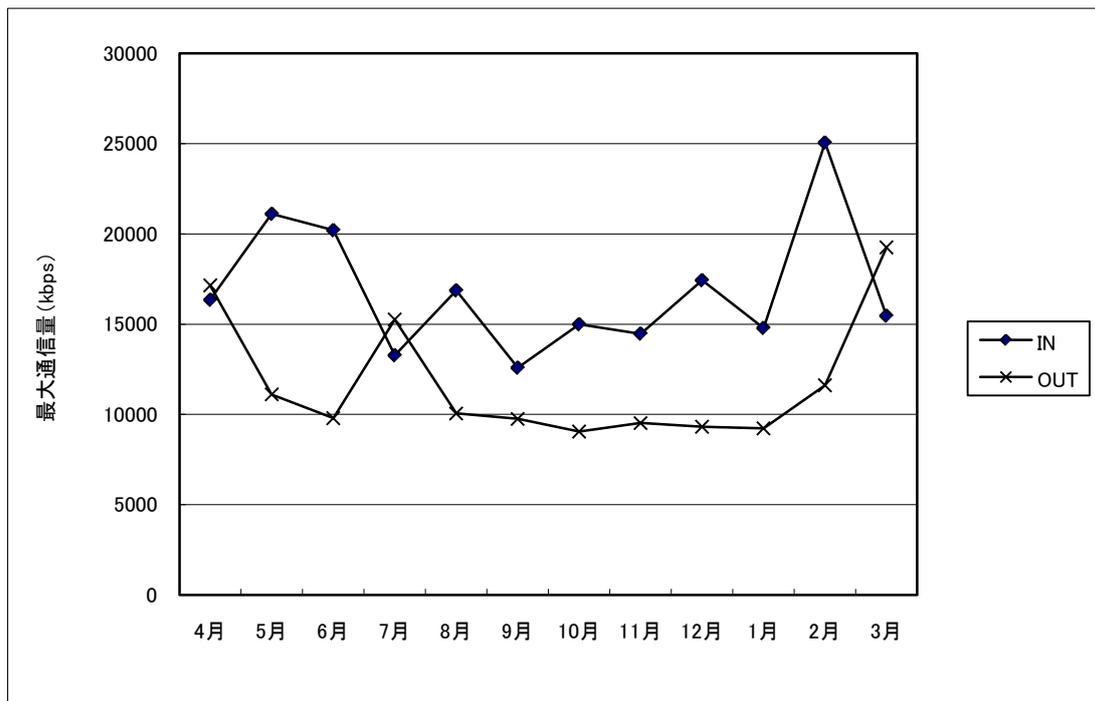
情報処理センター	278	A、C、理科教育棟	394	F棟	12
B棟、実践総合センター	449	G棟	228	D、特美、トレセン棟	121
本部庁舎	312	大学会館等	48	図書館	109
国際交流会館	79	環境センター	14	高校	308
特別支援学校	114	桃山中学校	215	幼稚園	24
桃山小学校	177	京都中学校	465	京都小学校	199
駅前サテライト教室	3				
			合計		3546台

平成11年ATM導入以降学内ネットワーク接続数は急速に増大している。現在学内すべての研究室・講義室・演習室・事務室に100Mbpsの情報コンセントが敷設されている。平成18年2月の機器更新時に基幹コアスイッチまでを1Gbpsで接続し、平成18年10月に各棟のエッジスイッチまでは1Gbpsで接続できるように増強を図った。平成19年2月には京都駅前サテライト教室と本学の間を100Mbpsで接続した。平成23年度はクライアント数が若干減少しているがこれはIPアドレスを割り当てているスイッチングハブをクライアントとしてカウントしなくなった事によるもので、平成24年度は再び増加している。



(2) トラフィック状況

a) 学外 (SINET) との通信量 (H23.4~H24.3)

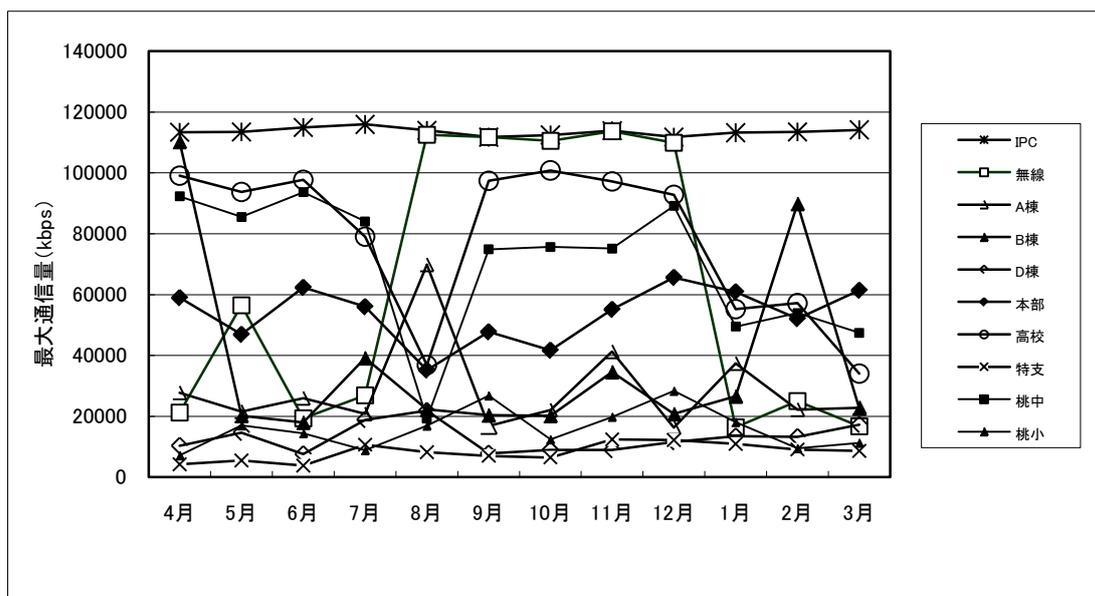


月ごとの最大通信量

本学のネットワークは平成 22 年 3 月より SINET へ 1 Gbps で接続されている。グラフは 1 カ月の最大通信量を月ごとに示したものである。最大通信量はおよそ 15Mbps 前後であり、多い月でも 25Mbps 程度である。

b) 学内の通信量 (H23.4~H24.3)

基幹コアスイッチと各建物のコアスイッチとの間の平均通信量を示す。



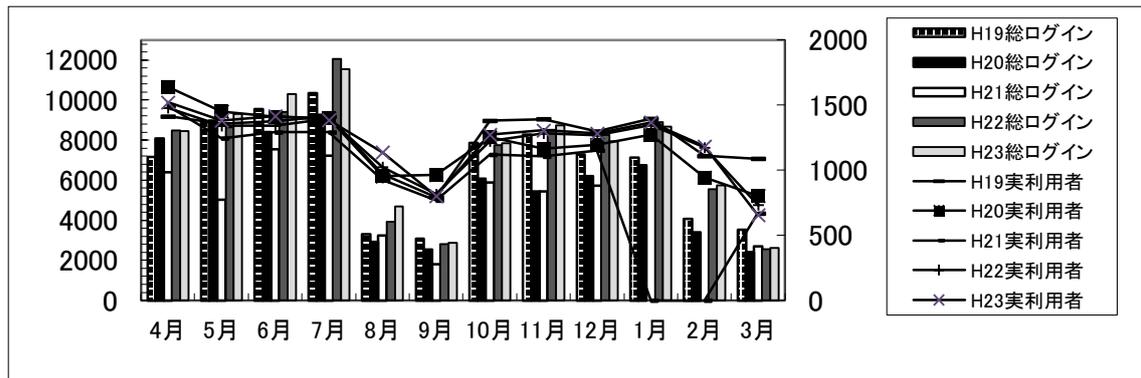
本学のすべての建物内には平成 14 年 4 月より全線 100Mbps、基幹部 1Gbps の高速 LAN が敷設されている。最大通信量は各建物おおむね 100Mbps 以下である。

§ 3. 端末室利用

(1) 端末室パソコン利用者数 総ログイン数(実利用者数) (H23.4~H24.3)

4月	8445(1521)	5月	9325(1382)	6月	10304(1416)	7月	11545(1385)
8月	4689(1138)	9月	2858(802)	10月	7860(1273)	11月	8722(1305)
12月	7934(1282)	1月	8669(1368)	2月	5755(1183)	3月	2605(656)

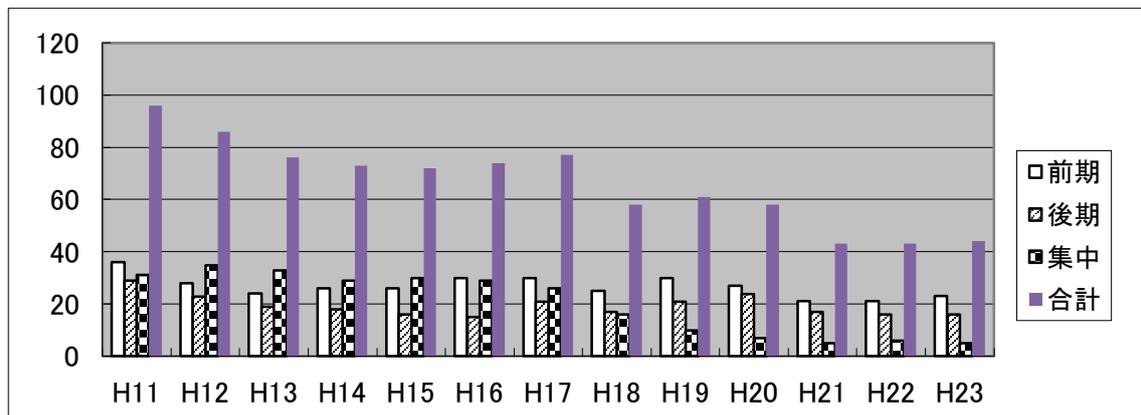
総ログイン数は毎月の利用延べ人数を指し、実利用者数が重複のない利用人数を表す。授業休止期間を除いて、多い月には1500人弱の利用者(ほとんど学生)が情報処理センターの端末を利用している。学部学生のIPC登録者数は§1に示すように1422人であるから、ほぼ全ての学生が毎月1回は利用していることになる。平成23年度の利用者数の傾向は例年とはほぼ同様である。



月ごと端末ログイン回数(左軸)、実利用者数(右軸)

(2) 端末室授業利用コマ数(H23年度)

前期 23コマ 後期 16コマ 集中授業 5コマ



年間端末利用コマ数推移

平成12年度に改組に伴う大幅なカリキュラム変更があり、全授業数が減少した。そのためIPC授業利用数もやや減少した。前期に片寄る傾向があるのは情報基礎科目(情報機器の操作など)を入学後早い時期に履修させるという措置の結果である。平成23年度の時間割は 頁参照。

§ 4. ワークステーション利用

1. 研究用ワークステーション (H24.3.22 現在)

(1) 登録者数

教職員 11人 学生 0人 合計 11人

(2) 利用者用ディスク使用量

利用者領域 (/home) 総容量 33.5GB 使用率 36%

§ 5. 貸出機器利用数

(1) 館外貸出

端末室以外での授業利用として、A4 ノート 25 台、MacBook5 台を貸し出している。MacBook の利用は非常に少ない。

月ごと機器利用延べ台数

	A4ノート パソコン	MacBook
2011年4月	24	0
2011年5月	29	0
2011年6月	39	0
2011年7月	60	0
2011年8月	219	0
2011年9月	18	0
2011年10月	56	6
2011年11月	62	0
2011年12月	58	0
2012年1月	79	0
2012年2月	122	0
2012年3月	10	0

(台)

(2) 館内貸出

マルチカードリーダー 延べ10台 メモリースティック 0 データ取り込み用ケーブル 0

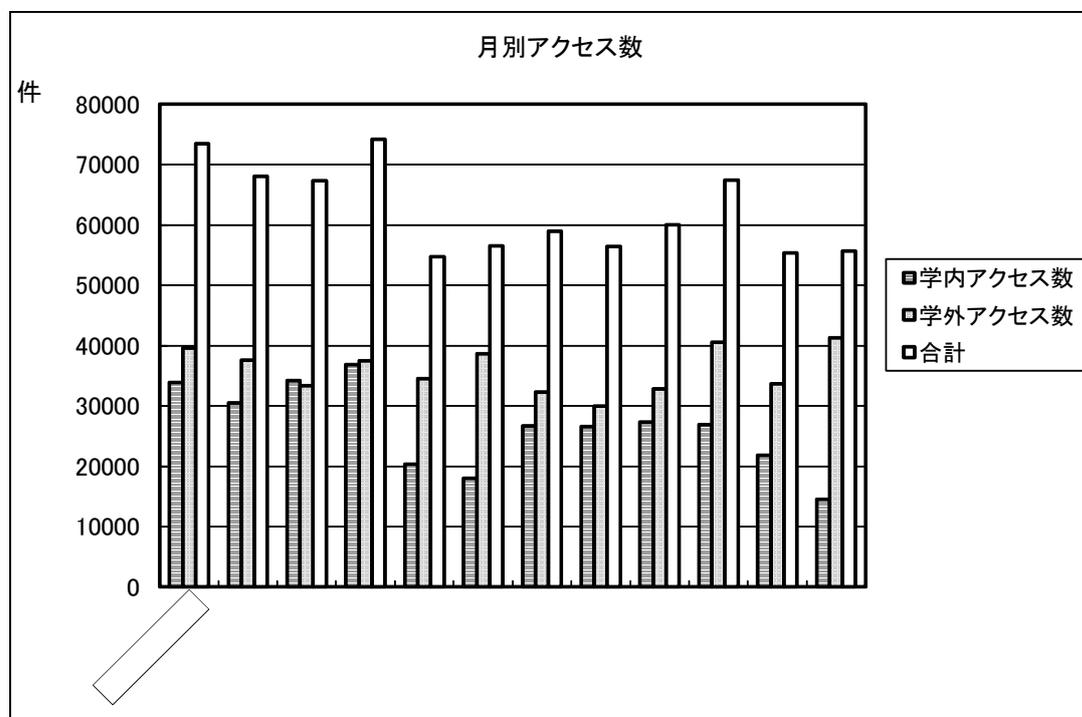
§ 6. 地域開放

8月6日に行われたオープンキャンパスにおいて施設開放を行った。端末室内で、IPCの機器概要やネットワークの役割などを紹介した。来場者数を下の表に示す。平成22年度以降来場者数が大幅に減少したが、これはIPCがキャンパスツアーの見学ルートに含まれなくなったことによるものであり、一般の来場者数は大きく変化していない。なお秋のオープンキャンパスは、来場者が少ないため平成21年度から中止となっている。

オープンキャンパス(大学説明会)来場者数					
	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
8月	133	200	87	19	13
11月	14	6	-	-	-
					(人)

§ 7. 京都教育大学ホームページアクセス数

本学のホームページは、セキュリティ上、学内からのアクセス用と、学外からのアクセス用を区別して別サーバに格納している。両者の内容はアクセス数のカウンタのみ異なり、他の部分は毎日自動的に学内から学外へコピーされるので全く同じである。平成 23 年度における学内からのアクセス数と学外からのアクセス数を示す。



§ 8. 学内一括送信配信数

本学では学内教職員、学生に対して周知の迅速化及び徹底化を図るため、周知内容を各部局から情報化推進室に依頼し、以下の所属階層ごとに電子メールで送付する一括送信サービスを行っている。平成 23 年度に依頼された階層ごとの一括送信数は以下の通りである。依頼元は主に学内委員会、事務局、附属センターである。

全一括送信	134
教職員一括送信	68
全教員一括送信	12
大学教員一括送信	99
附属教員一括送信	1
職員一括送信	41
全学生一括送信	59
学部学生一括送信	4
院生一括送信	1
教授会構成員一括送信	19
教職大学院生一括送信	0
特別専攻科生一括送信	0

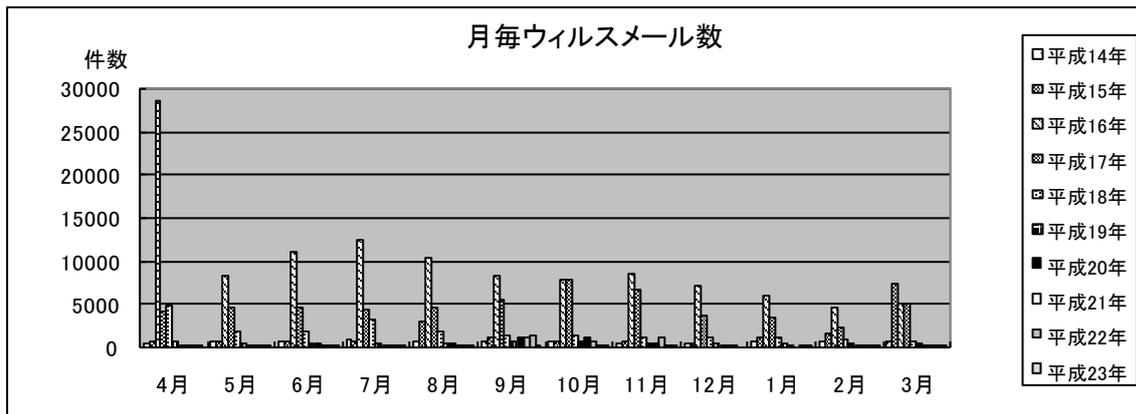
合計 438 件

§ 9. ウィルス対策

1. メールサーバによるウィルス駆除

本学のメールサーバにはウィルス駆除システムが導入されており、学外からウィルスに感染したメールが送信されてきた場合サーバで検知し、受信者にはそのままでは送らないようになっている。

平成 14～23 年度にウィルスを検知し対処したメール件数を示す。平成 23 年度は、多い月でも 50 件程度、メールのウィルス駆除サーバを運用開始してから、はじめて検出数が 0 件の月があり前年に引き続き少ない水準で推移していることがわかる。



2. ウィルス駆除ソフト配信システム

全学のパソコン端末に対し、ウィルス駆除ソフトの導入を徹底するため、ウィルス対策サーバにウィルス駆除ソフト配信システムを導入している。情報処理センターの WWW サイトから **Symantec Endpoint Protection** がダウンロードでき、その後は配信サーバの管理のもと、ウィルス定義ファイルの自動更新、パソコンの自動チェックが行われる。現在このサービスを利用している端末数は 559 である。全学の端末に占める割合は依然として低いので、今後もこのサービスの拡大を図り、学内の情報セキュリティの徹底に努めたい。配信サービスを受けていない端末の一部は独自にウィルス駆除ソフトを導入しているが、全くウィルス対策を施していない端末もまだ多いと思われる。

§ 10. インターネット配信

動画ストリーミング配信システムにより、学内の主な行事を動画配信している。インターネット配信のページは本学のホームページから開くことができる。昨年度配信した学内行事を以下に示す。

平成 23 年 4 月 5 日 入学式
平成 24 年 3 月 23 日 卒業式

情報処理センター利用授業時間割表(平成23年度前期)

		月	火	水	木	金
1 限	1 室	情報機器の操作(a) 多田 知正	スポーツ情報論(5月~) 中 比呂志	端末室清掃 いずれか一部屋は開放 しています	情報機器の操作(e) 中峯 浩	電子計算機 佐竹 伸夫
	2 室	情報機器の操作(a) 多田 知正		端末室清掃 指定する端末室のみ利用 可能	情報機器の操作(e) 中峯 浩	電子計算機 佐竹 伸夫
	3 室		電磁気学基礎(6, 7月のみ) 高嶋 隆一	端末室清掃 清掃中の端末室は入室 禁止		
2 限	1 室	情報機器の操作(b) 多田 知正	基礎セミナー(体育領域) 小松崎 敏	情報機器の操作(g) 伊藤 伸一	中等数学科教育Ⅱ (4月~6月) 渡邊 伸樹	
	2 室	情報機器の操作(b) 多田 知正	基礎セミナー(体育領域) 小松崎 敏	情報機器の操作(g) 伊藤 伸一	中等数学科教育Ⅱ (4月~6月) 渡邊 伸樹	
	3 室	製図(6月~7月) 関根 文太郎	障害児心理特論Ⅱ 三浦 正樹	コンピュータと情報処理 ↑ 飯間 等		
3 限	1 室	情報機器の操作(c) 佐竹 伸夫	総合演習(A7) 佐竹 伸夫			
	2 室	情報機器の操作(c) 佐竹 伸夫				
	3 室		障害児教育工学 梶川 裕司			コンピュータグラフィックス 宇澤 美貴
4 限	1 室	情報機器の操作(d) 伊藤 伸一	情報機器の操作(f) 多田 知正			
	2 室	情報機器の操作(d) 伊藤 伸一	情報機器の操作(f) 多田 知正		教育心理学実験Ⅱ (5月) 水谷 宗行	
	3 室	スポーツ指導論A 高安 和典	アルゴリズムとデータ構造 佐竹 伸夫			コンピュータグラフィックス 宇澤 美貴
5 限	1 室		情報機器操作法(b) 佐々木 真理			
	2 室		情報機器操作法(b) 佐々木 真理			
	3 室	情報機器操作法(a) 佐々木 真理				
6 限	1 室					
	2 室					
	3 室					
7 限	1 室					
	2 室					
	3 室					

情報処理センター利用授業時間割表(平成23年度後期)

		月	火	水	木	金
1 限 8:45 ~ 10:15	1 室		端末室清掃 いずれか一部屋は開放 しています		中等数学科教育Ⅲ 柳本 哲	
	2 室		端末室清掃 指定する端末室のみ利 用可能		中等数学科教育Ⅲ 柳本 哲	
	3 室		端末室清掃 清掃中の端末室は入室 禁止		教育実践基礎演習e 竹花 裕子	
2 限 10:30 ~ 12:00	1 室					
	2 室					
	3 室				教育実践基礎演習f 竹花 裕子	量子力学(12月、1月の み) 高嶋 隆一
3 限 12:50 ~ 14:20	1 室				生活情報処理 志垣 智子	
	2 室	測定・検査法 三浦 正樹	総合演習(B3) 深尾 武史		地学基礎実験(b) 谷口 慶祐	
	3 室	地学基礎実験(a) 谷口 慶祐	総合演習 高嶋 隆一		美術教育とコンピュータ利用 村田 利裕	地学実験(11/25~) 谷口 慶祐
4 限 14:35 ~ 16:05	1 室	情報構造とデータ ベース 佐竹 伸夫	コンピュータと情報処理 Ⅱ 佐竹 伸夫			
	2 室					教育心理学実験ⅠB(12 月~) 水谷 宗行
	3 室	地学基礎実験(a) 谷口 慶祐			地学基礎実験(b) 谷口 慶祐	地学実験(11/25~) 谷口 慶祐
5 限 16:20 ~ 17:50	1 室				測定・検査論特講 田中 あゆみ	
	2 室					
	3 室					
6 限	1 室					
	2 室					
	3 室					
7 限	1 室					
	2 室					
	3 室					

平成23年度集中講義など

授業名	担当者名	端末室	日程
学校図書館司書教諭講習 「情報メディアの活用」	北 克一	1・2	8/18(木)8:45～17:00
情報メディアの活用	宮田 仁	1・2・3	6/25(土),26(日),8/11(木),12(金)12:00～17:00
マルチメディア表現と技術	渡壁 光温	3	2/13(月)～16(木)1～4限
障害児社会調査	田中 智子	2	8/9(火)14:00～17:00
情報基礎実験	多田 知正	3	12/17(土)2～5限

平成23年度情報処理センター利用授業内容(教育学部)

科目区分	授業科目	授業内容	開講期	単位	登録者数	教員
共通	基礎セミナー(体育領域)	体育領域専攻1回生を対象とした基礎セミナーにおいて、情報処理センターPCを活用しながら、小グループによる課題研究を進める形式で実施しました。 研究報告書の執筆に際してMicrosoft WordおよびExcelを、また研究成果のプレゼンテーションに際してPowerPointを利用させました。 講義が試験週間にずれ込んでしまいましたが、試験期間における利用申請を行っていなかったため、関係の皆様にご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。	前	2	33	小松崎
	情報機器の操作(a)	WWWを用いた情報収集、Wordを用いた文書作成、Excelを用いたデータ集計、PowerPointを用いたプレゼン資料作成などの実習を行った。	前	2	49	多田
	情報機器の操作(b)	WWWを用いた情報収集、Wordを用いた文書作成、Excelを用いたデータ集計、PowerPointを用いたプレゼン資料作成などの実習を行った。	前	2	41	多田
	情報機器の操作(c)	以下の講義と演習を行った。 1. IPCの利用上の注意及び電子メールの使い方 2. EXCELを用いた表作成 3. 電子黒板の使い方 4. WORDを用いた文書作成 5. インターネットによる情報収集・検索の方法 6. PowerPointを用いたプレゼンテーション技法	前	2	57	佐竹
	情報機器の操作(d)	メールの利用方法 オフィスの使い方 パワーポイントを使った発表の練習	前	2	49	伊藤
	情報機器の操作(e)	1. IPCから指示された内容 2. Wordを使った実習(自己紹介など) 3. Excelを使った実習(家計簿やグラフ作成など) 4. パワーポイントによる実習(紙芝居の作成)	前	2	45	中峯
	情報機器の操作(f)	WWWを用いた情報収集、Wordを用いた文書作成、Excelを用いたデータ集計、PowerPointを用いたプレゼン資料作成などの実習を行った。	前	2	36	高嶋
	情報機器の操作(g)	メールの利用方法 オフィスの使い方 パワーポイントを使った発表の練習	前	2	47	伊藤
教職	中等数学科教育Ⅱ	VisualBasicを利用し解析内容(中・高数学)の教材開発	前	2	41	渡邊
	中等数学科教育Ⅲ	授業内容と関わって、以下のテーマで教材レポートを作成させた。 ①リーグ戦の勝点 ②血中アルコール濃度 ③動植物の保存 ④資料の活用(記述統計) ⑤電力問題の数学モデル化	後	2	32	柳本
	教育実践基礎演習 e,f	PCIによるプレゼンテーションの特性を活かした模擬授業(マイクロティーチング)の教材作り・著作権に配慮した引用・画像、映像を取り入れたプレゼン	後	2	41	竹花
	総合演習(A7)	受講者による以下の3回のは発表と議論を通して、脳に関する知識を深め、教育現場で活かせる脳科学について理解を深めた。 1回目の発表 脳の各部位の構造と働き 2回目の発表 互換の処理や運動・睡眠などの活動が、脳にどのような働きによるか？ 3回目の発表 「男女における脳の違い」や「知能を測定する方法」など教育現場で活かせる脳科学	前	2	20	佐竹
	総合演習(B3)	総合演習にてIEを用いて情報収集し、パワーポイントを用いて発表を行った。	後	2	20	深尾
	総合演習(B4)	gnuplotの使い方、イラストレーターの使い方を学んだ。ウェーブスペクトラを使い楽器の基本振動や倍音について学んだ。Cigwinを使い、平均律、純正律の音階について学んだ。統計誤差について乱数を使って学習した。GPSのデータをPerl言語を使って処理し、地図上に経路を表示する方法を学んだ。数値計算をFORTRANを使って行う方法を学んだ。RSA暗号についてJavaScriptを使って演習した。	後	2	20	高嶋
産業技術	製図	3次元CADによる設計製図	前	2	13	関根
	情報基礎実験	Aliceというソフトを使ってオブジェクト指向プログラミングの考え方を理解するための演習を行った。説明資料をPowerPointとプロジェクトを用いて提示した。	後	1	12	多田
数学	電子計算機	以下の講義を行った。 1~4コマ目 EXCELの復習 5コマ目以降 EXCEL VBAを用いて、マクロの計算方法、編集方法、作成方法、実行方法を学び、徐々に複雑な成績処理ができるようにした。 この授業により、基礎的なプログラミング能力と、校務にICTを活用する能力の両方を身に付けさせた。	前	2	38	佐竹
体育	スポーツ指導論A	ビデオ撮影した画像をAviutilityを使用してPCにて解析した。MS Excel等にて①連続写真を作成②疾走速度曲線を作成させ走運動の特性を学習させた。	前	2	26	高安
	スポーツ情報論	エクセル及びSPSSを用いたデータ解析について授業を行った	前	2	30	中
美術	コンピュータグラフィックス	主にIllustratorとPhotoshopの操作技術修得。	後	2	10	宇澤
	美術教育とコンピュータ利用	受講生は13人でした。Windows7と現在のマシンが高速なためか、パワーポイントのソフトづくりで、音と映像の一致を指摘する声が少なくなりました。実は、新しくなるとすぐは、外部ファイルを読み込むにウイルスチェックを強固(!)にするためか、以前よりもう一致(遅れて音が出る症状)が多い時期がありましたが、嬉しいことに何故か改善されています。Windows7側なのか、ウイルスチェックソフト側なのかわかりませんが、調子がよくなっています。フォトショップはフルバージョンなので演算機能が使えて、学生は、歓喜(?)の声をあげて授業を受けています。	後	2	13	村田
発達障害	測定・検査法	データの尺度、データ入力 データ偏重、図表 記述統計 χ^2 検定、t検定、相関係数 多変量解析、因子分析	後	2	2	三浦
	障害児社会調査	授業内に実施したアンケートの集計・入力・分析作業を行った。	前	2	2	田中(智)

科目区分	授業科目	授業内容	開講期	単位	登録者数	教員
理学	地学基礎実験(a)	地学に関する様々なデータをEXCELやC言語のプログラムによって処理した。	後	2	27	谷口(慶)
	地学基礎実験(b)	地学に関する様々なデータをEXCELやC言語のプログラムによって処理した。	後	2	20	谷口(慶)
	地学実験	防災科学技術研究所が管理する地震波のデータをダウンロードし、様々な手法で処理し、解析を行った。	後	2	6	谷口(慶)
	物理学基礎	マイクロソフト・EXCELを使用し、「物理学基礎」の講義中に紹介した物理法則およびその帰結をグラフ化することにより視覚的に理解できるようにした。	前	2	25	串田
	量子力学	ガウス型波束の運動のアニメーションをgnuplotを使って作成した。水素原子のエネルギー固有値をルンゲクッタ法による収束条件で求める方法を学んだ。主量子数と角運動量子数の関係をルンゲクッタ法による微分方程式を解く方法により調べる方法を演習した。磁場の中の核子や電子の才差運動がシュレディンガー方程式を解くことによって説明されることを学び、スピン回転のアニメーションを作成した。	後	2	11	高嶋
家政	生活情報処理	家庭領域の学生15名の生活情報処理を担当しました。情報化の進展に伴う産業や生活の変化について、論ずるとともにコンピュータなどを用いて得られた情報を有効に処理し活用するための方法を習得する演習を行いました。具体的には表計算ソフトによる情報処理、統計処理、データベース構築と活用、文書作成ソフトの活用、パソコンを使ったプレゼンテーション、通信ネットワークを利用した情報収集等です。学生一人ひとりの状況に合わせて、丁寧に指導しました。学生からは、他授業でのレポート作成に本授業内容を活用できたとの声も聞かれました。	後	2	15	志垣
農業・商業・情報・工業	コンピュータと情報処理Ⅰ・プログラミングⅡ	信号を用いた情報処理に関する講義と演習を行った。また、信号処理ソフトウェアSCILABを用いた演習を行った。	前	2	29	飯間
	アルゴリズムとデータ構造	以下の講義と演習を行った。 1～8コマ目 C言語により、より複雑なプログラミングができるようにする。特に、ポインタ、ファイル出力、構造体を扱った。 9～11コマ目 ソートの各アルゴリズムを、C言語で実現した。 12コマ目以降 ソートだけでなく、いろいろな目的で利用されるアルゴリズムの計算量の評価方法と、種々のデータ構造をC言語でどのように実現するのかを解説した。	前	2	13	佐竹
	コンピュータと情報処理Ⅱ	高校情報免許取得希望者を対象に、プログラミング経験を積む機会を提供する目的でCプログラミング基礎の講義と演習を行った。具体的にはhello worldから基本データ型、演算子、配列、ループなどの制御構造、関数、関数の再帰呼び出し、文字列までの講義と演習を行った。	後	2	26	佐竹
	情報構造とデータベース	1～12コマ目 MySQLとACCESSを用いたリレーショナルデータベースの設計と構築 1コマ目 MySQLの準備としてUNIXの操作方法 2～7コマ目 MySQLを用いたリレーショナルデータベースの設計と構築 8～10コマ目 ACCESSを用いたリレーショナルデータベースの設計と構築 11～12コマ目 リレーショナルデータベースの理論と技術に関する講義 13～15コマ目 Prologを用いた述語論理に基づくデータベースの設計と構築	後	2	26	佐竹
	マルチメディア表現と技術	デジタルフォト画像処理→フライヤー、web画像制作→アニメーション(webバナー、キャラメル画像)制作	後	2	24	渡壁
教育	教育心理学実験Ⅱ	心理学実験法(調査法)の統計分析の実習を行った。具体的には因子分析を主として、他に相関分析、分散分析など統計ソフトの操作方法についての学習を進めた。	前	1	9	水谷伊藤(崇)
	教育心理学実験ⅠB	受講している2回生8名にSPSSの基本統計量、因子分析、分散分析の手法を中心に講義・実習した。	後	1	8	水谷
自由科目	情報メディアの活用	本講義は学校図書館司書教諭免許取得のための必修科目の一つであり、学校図書館での情報メディアの活用の現状と課題を考察し、学校の情報化に対応した今後の情報メディアの活用のあり方を考究する。また、実際に電子図書館の利用体験を演習活動に取り入れ、電子図書館の現状と課題に関しても考察する。情報メディアと著作権、個人情報の保護も解説する。 上記のうち、IPCでの演習活動を、以下の点を中心に行った。 1. 小・中・高校の母校のWebページの発信内容の分析 2. 学校Webページの現状と課題のディスカッション 3. 図書館情報メディアの活用、OPAC、NACSIS Webcat、ERIC 4. 電子図書館の体験。(貴重図書の展示、小説の配信、電子絵本、学術論文の電子図書)	前	2	74	宮田

平成23年度情報処理センター利用授業内容(特別支援教育特別専攻科)

授業科目	授業内容	開講期	単位	登録者数	教員
障害児心理特論Ⅱ	データの入力、データの種類の、データ編集 Excel関数 代表値、散布度 統計的検定 χ^2 検定、 t 検定、anova 多変量解析 因子分析 アンケート実習 アンケートの作成、実施、分析	前	2	5	三浦
障害児教育工学	インターネットによる障害児教育関係のデータベース検索や教具としてのマルチメディアの活用及び各自のテーマに基づいた統計的手法の活用などを講義と演習を通して各自で進めながら、その成果に対してプレゼンテーションを行う。	前	2	20	梶川

平成23年度情報処理センター利用授業内容(教育学研究科)

授業科目	授業内容	開講期	単位	登録者数	教員
測定・検査論特講	測定・検査における信頼性・妥当性を高めるために必要なことについてデータをもとに解析しながら講義を行った。	後	2	16	田中

平成23年度情報処理センター利用授業内容(連合教職実践研究科)

授業科目	授業内容	開講期	単位	登録者数	教員
情報機器操作法(a)	連合教職実践研究科の学生を対象に実施した。 Wordによる3つ折りパンフレット・学級通信の作成方法 Excelの判別関数・参照関数による成績表・献立表の作成方法 Internet Explorerによる教育用Webサイトの検索と報告会 PowerPointによる教材スライド製作と模擬授業	前	2	8	佐々木
情報機器操作法(b)	連合教職実践研究科の学生を対象に実施した。 Wordによる3つ折りパンフレット・学級通信の作成方法 Excelの判別関数・参照関数による成績表・献立表の作成方法 Internet Explorerによる教育用Webサイトの検索と報告会 PowerPointによる教材スライド製作と模擬授業	前	2	28	佐々木

平成23年度情報処理センター利用授業内容(教育職員免許法など)

授業科目	授業内容	開講期	登録者数	教員
学校図書館司書教諭講習 情報メディアの活用	書誌記述に基づきインターネット上の種々の情報資源の探索と評価を実習した。	夏季	38	北

平成 23 年度 IPC NEWS の発行状況

平成 23 年度は、IPC NEWS No.186 (2011 年 4 月 1 日) から No.196 (2012 年 3 月 5 日) まで合計 12 回発行しました。これらのニュースでは、各月の行事予定および集中講義・公開講座の開催について利用者に知らせるとともに、計算機利用、ネットワーク利用についての様々な学内への情報提供を行なっています。

各月の主だった内容は以下の通りです。(行事予定、前月の再録は省いてあります。)

No.186 端末室 1 で持ち込み PC をプロジェクタに接続する場合の注意 (教員)

入学式の映像配信について
端末室床板交換工事が終了しました
情報処理室の Mac からの印刷中止について
プリンタの印刷枚数制限について
情報処理センター利用授業時間割表 (平成 23 年度前期)
本学におけるメール送受信数データ (2011 年 2 月までの集計)
本学におけるウイルス発見件数 (2011 年 2 月までの集計)

No.187 館内での飲食禁止について

プリンタの不具合は必ず報告を
本学におけるメール送受信数データ (2011 年 3 月までの集計)
本学におけるウイルス発見件数 (2011 年 3 月までの集計)

No.188 セキュリティ特集号外について

館内での飲食禁止について
傘の紛失に注意してください
端末室の冷房について
プリンタの不具合 (紙詰まりなど) は必ず報告してください
本学におけるメール送受信数データ (2011 年 4 月までの集計)
本学におけるウイルス発見件数 (2011 年 4 月までの集計)

号 外 ソフトウェアの不正利用について

インターネットへの書き込みについて
Windows のアップデートについて
メールの送信先について

No.189 後期の端末室利用について

利用結果報告書の提出について
同一書類の印刷について
本学におけるメール送受信数データ (2011 年 5 月までの集計)
本学におけるウイルス発見件数 (2011 年 5 月までの集計)

No.190 プロキシの自動設定について

印刷枚数の上限値について
本学におけるメール送受信数データ (2011 年 7 月までの集計)
本学におけるウイルス発見件数 (2011 年 7 月までの集計)
情報処理センター利用授業時間割表 (平成 22 年度後期)

No.191 端末室パソコンのソフトウェア更新について

省エネへのご協力をお願い
本学におけるメール送受信数データ (2011 年 8 月までの集計)
本学におけるウイルス発見件数 (2011 年 8 月までの集計)

- No.192 来年度授業利用調査について
プリンタの不具合について
本学におけるメール送受信数データ（2011年9月までの集計）
本学におけるウィルス発見件数（2011年9月までの集計）
- No.193 利用結果報告書の提出について
IPC 指導員募集について
プリンタの不具合について
USB メモリの利用について
本学におけるメール送受信数データ（2011年10月までの集計）
本学におけるウィルス発見件数（2011年10月までの集計）
- No.194 年度替りに伴うメールアドレスの取り扱いについて
非常勤講師のメールアドレスの取り扱いについて
利用ルールの遵守について
本学におけるメール送受信数データ（2011年11月までの集計）
本学におけるウィルス発見件数（2011年11月までの集計）
- No.195 退職・転職する教職員のメールアドレス利用延長について
来年度授業利用申請の提出について
プリンタ用紙について
本学におけるメール送受信数データ（2011年12月までの集計）
本学におけるウィルス発見件数（2011年12月までの集計）
- No.196 卒業式、入学式の映像配信について
本学におけるメール送受信数データ（2012年1月までの集計）
本学におけるウィルス発見件数（2012年1月までの集計）

平成 23 年度行事日誌

平成 23 年

- 4月 1日 IPC NEWS No.186 発行
- 4月 1日、5日、7日 新入生のための学内ネットワーク利用講習会
- 4月 5日 入学式インターネット配信
- 4月 7日 新入生オリエンテーション
- 4月 21日 富士通との定例会議
- 4月 28日 4月スタッフ会議
- 5月 2日 IPC NEWS No.187 発行
- 5月 19日 富士通との定例会議
- 5月 26日 5月スタッフ会議
- 6月 1日 IPC NEWS No.188、号外発行
- 6月 16日 富士通との定例会議
- 6月 23日 6月スタッフ会議
- 7月 1日 IPC NEWS No.189 発行
- 7月 14日 富士通との定例会議
- 7月 28日 7月スタッフ会議
- 8月 6日 オープンキャンパス 施設見学（参加 13 名）
- 8月 15～19日 夏季休館
- 8月 25～26日 第 23 回情報処理センター等担当者技術研究会（室蘭工業大学）
- 9月 1日 富士通との定例会議
- 9月 1日 IPC NEWS No.190 発行
- 9月 16日 富士通との定例会議
- 9月 26日 9月スタッフ会議
- 10月 1日 IPC NEWS No.191 発行
- 10月 5日 IPC 運営委員会
- 10月 20日 富士通との定例会議
- 10月 24日 10月スタッフ会議
- 11月 1日 IPC NEWS No.192 発行
- 11月 4日 見学（八幡市立男山第二中学校 12 名）
- 11月 17日 富士通との定例会議
- 12月 1日 IPC NEWS No.193 発行
- 12月 6日 IP ネットワーク連絡会および第 20 回 NCA5 総会（キャンパスプラザ京都）
- 12月 7～9日 大学 ICT 推進協議会 2011 年度年次大会（福岡国際会議場）
- 12月 15日 富士通との定例会議
- 12月 21日 12月スタッフ会議
- 12月 29日～平成 24 年 1 月 4日 冬季休館

平成 24 年

- 1月 4日 IPC NEWS No.194 発行
- 1月 19日 富士通との定例会議
- 1月 26日 1月スタッフ会議
- 2月 1日 IPC NEWS No.195 発行

2月10日 見学（南城陽中学校 36名）
2月16日 富士通との定例会議
2月23日 2月スタッフ会議
3月 5日 IPC NEWS No.196 発行
3月15日 富士通との定例会議
3月23日 3月スタッフ会議
3月23日 卒業式インターネット配信

IPC ワークステーション利用者一覧

(順不同、電子メール、インターネットのみの利用及び授業受講は除く)

氏名	利用目的 (研究題目など)
佐竹 伸夫	大学院の授業「情報数学特論」の教材作成、子供の発話データの分析
伊藤 伸一	金属中の磁性不純物
中峯 浩	魚群行動のシミュレーション

IPC 関連委員会等歴代委員

	氏 名	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
運営委員会 ◎委員長 □役職指定	田岡 文夫			◎	◎	◎
	谷口 淳一	◎	◎			
	矢野 喜夫	○				
	多田 知正	□	□	□	□	□
	福間 則夫	○	○			
	村田 利裕	○	○			
	水谷 宗行		○			
	平井 恭子			○	○	
	桐木 紳			○	○	
	田中 多佳子			○	○	
	谷口 慶祐					○
	中 比呂志					○
	武田 一郎					○
運用担当者 ◎センター長 △次長	田岡 文夫			◎	◎	◎
	谷口 淳一	◎	◎			
	沖花 彰	○	○	○	○	○
	谷口 慶祐	○	○			
	佐竹 伸夫	○	○	○	○	○
	村田 利裕	○	○	○	○	○
	A.オーバマイヤー					○
	佐々木真理	○	○			
	中 比呂志	○	○			
	多田 知正	△	△	△	△	△
	延原 理恵	○	○	○	○	
	吉江 崇	○	○	○	○	
	小松崎 敏			○	○	○
深沢 太香子					○	
事務局	秋山 剛志	○	○	○	○	○
	高木 亜里子	○	○	○	○	○

編集後記

「アメリカではすごいけれども日本で流行るかどうかな？」などと言われていた Facebook であるが、今やすっかり日本でも市民権を得たらしく、本学の教職員の中にも登録者がじわじわと増えているようである。そこで今年度は特集のテーマに Facebook を取り上げて、3人の先生方にご寄稿いただいた。今回ご寄稿いただいた先生方は、本学における Facebook のパイオニアではあるが、どちらかと言えばこれまでインターネットを積極的に使って来られたわけではない印象であった。そのような先生方をも巻き込んでしまう Facebook の「感染力」に改めて感心した次第である。一方で IT 関係に強いと思われる人たちに Facebook について聞いてみると意外に関心がなかったり「私は使いません」ときっぱりおっしゃる人もいたりするのもまた面白いところである。インターネット上でさまざまな事件や騒動を見てきた人間としては、インターネットに自分のことを「実名」で「晒す」ことには、まだまだ警戒感があるのであろう。かく言う私も Facebook の利用にはまだどことなく腰が引けており、登録はしたもののコメント一つ残していない「幽霊ユーザ」であるが、記事の中にもあったように、Facebook のおかげで昔のつながりが復活したり、新たなつながりが生まれたりということを目にすると、ちょっとはじめてみようかなという気も湧いてくる。実際今の勢いを見ると、そのうち日本でも「使うのが当たり前」という時代になるのかも知れない。くれぐれも「インターネットに出た情報はコントロールできない」ということを頭に置きつつ、節度を持って便利に活用していければと思う。

また本学に電子黒板が導入されて今年で2年目になる。そこで今回は「情報機器の操作」における電子黒板の授業の内容について報告した。このように授業の中で電子黒板を紹介することも重要であるが、より大切なのは学生が「使いたいときに使える」環境整備であると思われる。本学では今年度新たに電子黒板の導入が予定されているが、「置いてはあるけど誰も使わない」という状況にならないよう、設備面だけでなく制度面の整備もお願いしたいところである。

編集委員

田岡 文夫	多田 知正	沖花 彰
村田 利裕	佐竹 伸夫	小松崎 敏
Andrew Obermeier	深沢 太香子	
秋山 剛志	高木亜里子	